

# サッカー部 県大会を制覇!



二月八日に行われた県大会決勝において、筑後の名門伝習館高校を見事退け、念願の県下ナンバーワンに上りつめた若高サッカー部。長期間に渡るグラウンド拡張工事のため、練習場も思うままにならないという厳しい状況を克服しての栄冠だけに、部員や関係者の喜びもひとしおのことと思います。

優勝までの戦いぶりを振り返ってみましょう。

まずは北九州地区予選。第一戦は八幡工業高校に八対〇で完勝。第二戦は強敵豊国学園高校に二対一。第三戦は戸畑高校に二対一。第四戦は東筑高校に六対二で勝利。第五戦は九州工業大学に二対一で勝利。第六戦は三位決定戦。小倉工業高校を二対〇で破り、地区大会三位で県大会出場が決定。

準決勝の九州工業大学戦では、一瞬のスキをつかれて先取点を許した。ゴール前のつめ等の細かいミスが目立ち、相手の得点につながった。(主将の白石君談)

次は県大会。第一戦は八女工業高校に二対〇。第二戦は宿敵東海大第五高校に二対〇。第三戦の準決勝では北筑高校に二対〇。そして第四戦の名門伝習館高校との決勝戦では二対一で勝利。



発行所 新聞部 小石松高北  
 編集所 新聞部 若松高北  
 印刷所 印刷部 若松高北  
 (株)秀文社印刷(883)1234

「第一戦の東海大五戦では、こちらの気迫が相手を上回り、それがプラスになり、つめの早さやシュートチャンスにつながった。決勝の伝習館戦では、延長戦の後半終了寸前に一点を挙げ、攻撃にも粘りが出てきたように思う。」(主将白石君談)

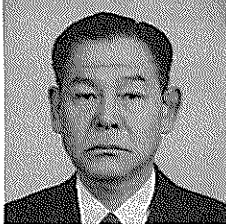
この結果、若高サッカー部は島原市で行われた九州大会に出場し、二月二十一日の第一戦では、熊本県の鎮西高校にPK勝ち。翌二十二日の第二戦で鹿兒島商工高校戦には敗れたものの、見事ベスト8入りを果たしました。

「最後のつめが甘く、チャンスをもものにできなかった。鹿兒島商工戦では、相手のパス回しの速さやシュート力にこちらを上回っていた。数々の課題を残した大会。」(主将白石君談)

大舞台での善戦をステップ・ボードとして、今後の活躍が大いに期待されます。

## 島原城下で聞いた校歌

学校長 吉開 和男



本年度の挿尾を飾るイベントとして、サッカー部が第8回九州高校新人大会に出場した。若高としては、実に20数年振りの快挙であったので、生徒指導部の先生方と相談して、プラスチックバンド部を中心とする応援団を派遣することにした。プラスチックバンド部の総員は、指揮をとっていただいた堀切先生ほか36名、これにベンチに入らないサッカー部員、サッカー部の保護者及びPTA役員、運営委員の皆さん、それに本校の職員で直接業務に支障のない者を加えて、実に90名の応援団となった。

このような例は、かつての若高にはなかったことであり、私が最近唱えている心とする応援団を派遣する若高の一体感、所属感の強さを現れと思えて欣快至極のことであった。

試合は、第一回戦で熊本県の鎮西高校にPK戦のすえ勝利を得て、念願のベスト8入りを果たした。準々決勝では鹿兒島の雄、鹿兒島商工高校と対戦したが、前半の開始早々の4分にゴールを決めて幸先きよい出だしとなったが、後半スタミナ不足で出足がとまり、終了



## スキー教室を終えて

旅行委員長 二年六組 田中 義勇

去る二月十三日から二月十七日にかけて、「スキー教室」が行なわれました。十三日の朝、新幹線に乗り、その後電車・バスを乗り継いで、約10時間近くの長い道程から、このスキー教室が始まりました。

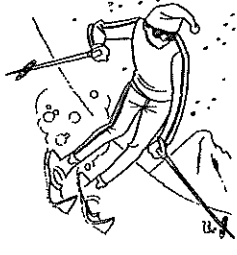
最初は誰ともなく、「東京の方がいい」とか、「スキーとかおもしろくない。どうせすべれんもん」とか言う声もしばしば。

実際、列車の窓から見えるのは、いつも見慣れた街なみや、見わたす限りの田んぼや畑だけで、時折見える断崖絶壁が目につく程度でした。

しかし、長野に近づくと、田畑の上を雪が覆う光景もみられ、少しずつ直前までつづける3点をとられて惜敗したのは、まことにいたし方のないことであつたと思ふ。

準々決勝の行われた島原商業高校は島原城下にあり、指呼の間に天守閣を望む絶好の位置にあり、敗戦のきまつた直後、プラスチックバンド部が、校歌を吹奏、応援団が校歌を斉唱してくれたのには感無量の思いを禁じ得なかつた。

昭和62年度も間もなく開幕する。新1年生70名を迎えて、在校生一同が心を合せて、若高の一体感をさらに上げてほしいものである。



分が高まり始めていました。ところが、長野駅につくと、どこを見ても雪がない。「これで、本当にすべれらんかなあ」という気持ちでチラホラ。

しかし、ホテルにつくまでにはその不安は掃き払われました。

今まで見たことのないくらいに、深く降り積った雪がそこにあつたからです。そここうしているうちに、初日は終り、いよいよ、ス

スキー教室の開校式の日となりました。初日の午前中は、さすがにみんなこわごわとやっていたのが、午後になるとつれ、スイスイすべれるようになってきました。

三日目、四日目ともなると、難しいコースも難なくすべる姿も。

「スキーがこんなに思つたことでしょうか。そして、「もう少しここにいたい」と思う人も多かつたと思います。

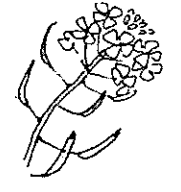
こうして、長いようで、短かつた、四泊五日のこの旅も終りました。

この旅行は、僕達に色々な体験をさせてくれた、価値ある旅でした。

## 言いたい放題

今の子供は、それぞれの発達段階に応じて必要以上に縛られていないか、方程式の解けない子供を脱着者として冷たくあしらう機構の中で生きていく以上、多少の拘束は避けられないのかもしれないが、それにも限度があるはずである。活気にあふれ、納得のゆくものにしか首を縦に振らないのが子供だが、大人はそういう子供をただ押さえつけるのではなく、彼らから忘れかけている何か重要なことを学ぶ必要があると思ふ。

「日本は教育水準が高い」とよく言われるが、本当にその通りだろうか。教育学者がベストロッチは3Hの教育を唱えたが、現状では三つあるHのうちの一つ、すなわちHead(頭脳)のみが重視されている。残る二つのH、つまりHeart(精神)、Hand(技能)はどつなつて



## 礪陵言

マナーの話  
 昼食後廊下を歩いていると、やたら菓子パンの袋が落ちてくるのが目につく。ときには、全部食べ終わらないうちに誤って落としたりと思われ、そのパンのかけらが、その無残な姿をさらしていることとさえある。どういふ気持ちでこういういふ加減な真似をするのか。グスターが近くになつたから、みんなそうしていったから、誰も見ていなかったから、言いわけならどうとでも言える。許せないのは、反省の色が全く見られないことである。菓子パンの袋の処理については、生徒集会、学年集会、H.R.等機会あることに注意を受けているはずなのに、平気で廊下をこみ箱代わりして澄ましていく。大手を振って廊下を歩いている。卑劣極まりない。

これは菓子パンの袋だけにとどまらない。食堂で使用した食器を返さない者、トイレレット・ペーパーを持ち出す者、便器に異物を投げ込む者、その他、教員挙げればきりがない。ごく少数の者の仕業に違いないが、まるで生徒全員が全員そういう調子のように思えてしまう。少数の横暴である。一部の不届き者のために生徒全員の体面が問われるというのでは、正直者は馬鹿をみていることになる。これではやりきれない。

学校内でのマナーを守れない者が、社会人となつて後、公衆道徳を守つて健全な生活を送れるとは思えない。社会人失格である。高等学校の教育を受けている諸君に、そういう人間にはなつてもらいたくないと思ふ。

# 葉言る送

## 432名の卒業生へ

三月七日は卒業式。四百三十二名の若人が若高を巣立ち、それぞれ自ら選んだ世界へ飛び込んで行く。花も嵐も踏み越えて、苦あれば楽あり——新世界での奮起を祈る。

\*\*\*

### 「想い出」

三年前の四月  
希望に胸ふくらませ  
若高坂を登り  
入学式会場へと  
歩を進めた  
集団研修  
体育祭  
文化祭  
寒いこ  
修学旅行  
みんな全力で臨んだ  
青春の第一段階を  
若高で過ごした  
悔いはない  
絶対はない

覚えていますが  
覚えていますか  
熱く燃える血潮  
道標のない旅  
あの日の輝きは  
永遠にこの胸の奥に

(T・F)

### 「春」

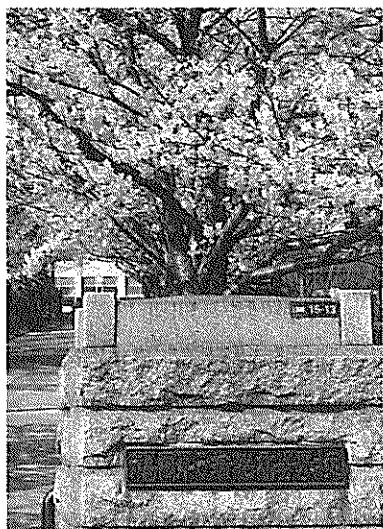
春の微風が冷たい  
樹々のうなじを走って  
君のところにやってくる  
眠りこくったみんなは  
草の燃える芳しい  
あの匂いを夢見てる  
春が来るんだな  
春なんだな  
ああ春か  
ヤッホー

(S・H)

### 「先輩」

覚えていますか  
先輩

(K・M)



いやいや  
ダイヤモンドの神秘  
でもない……  
言葉の奔放  
心の静止  
私の言葉と心は  
あの日から仲たがい  
おはよう こんにちは  
挨拶さえ省いた関係



### 「アンバランス」

自由気ままな言葉  
無責任の代償  
表現できない心  
不器用さの代償  
言葉の笑顔  
心の苦笑い

(H・F)

\*\*\*

## （ふりりたりむ）

今回はロシア文学。

ロシア文学と言えは誰の名前が浮かんできませんか。トルストイ、ドストエフスキ、チェホフ、ゴーゴリ、プーシキン、ガルシン、ゴリキ、ソルジェニーツィン等々、大物が目白押しですね。数ある名作の宝庫の中から、今回はゴーゴリの「外套」を選んでみました。



この万年九等官を見て

時は帝政ロシア時代。場所は首都ペテルブルグ。五十の坂を越した下級官吏が主人公。彼の名はアカキイ・アカキエウイッチ・バシマチキン。見栄えのない、誰からも相手にされない万年九等官。この万年九等官が「着る外套を新調する決意」をします。一世一代の決意を「二世」の代々の決意として買いに

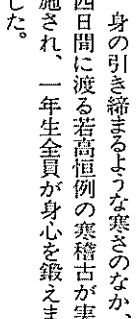
えるわけにはいきません。帝政ロシア時代と言えは今の百年以上も以前のこと。現在の日本のように自由が手に入る状況ではなかったというのを考えなければなりません。アカキイ・アカキエウイッチの年末賞与が四十七ルーブル。外装を一着新調するのに八十ルーブル。これで「二世」の代々の決意というは決して大袈裟な表現ではないことがわかります。

「半纏」と呼んでいます。この「半纏」に限らず、彼は上司や同僚たちから「少佐」というあだ名をもらっています。万年九等官で、五十を過ぎても重要な仕事は何一つありません。今なら百貨店やデパートへ行けば、安い値段のオーバー・コートがいくらでも置いてあります。「二世」の代々の決意を「二世」の代々の決意として買いに

この万年九等官を見て、忍耐、辛抱、誠実、という現代人の忘れかけている言葉が浮かんできます。日々単調な仕事しか与えられなくとも、上役や同僚たちにはいじめられても、不平一つ言わないで千年一日のよう自分の義務を果たしていく下級官吏。小説の主人公だからといって彼の日常が波乱に富んでいるわけではなく、平々凡々としたどこにでもいそうな一ペテルブルグ市民であることは間違いありません。



## 寒稽古終了 二月六日(金)～二月十日(火)



身の引き締まるような寒さのなか、四日間渡る若高恒例の寒稽古が実施され、一年生全員が身心を鍛えました。

の寒稽古から得たものは大きいと思えます。体力や運動能力だけでなく、忍耐力、闘争力、礼儀、集団のなかでの自己認識等々、ここで学んだことをこれからの学校生活に十分生かしてほしいものです。

### 編集後記



さいよいよ三学期も残りわずか。新学期に向けて、皆さんの心は希望に満ちあふれていることと思います。「備えあれば憂いなし」と言いますが、あとになって後悔しないよう何事につけても計画性をもち、行きたいこと、行きたいことをしっかりと行いましょう。

今回は貴重な紙面を借りて、我々部員から一言、七月号、十一月号、そしてこの三月号と、若高傑

末についてはここでは触れないことにします。読んでからのお楽しみ、ということにしましょう。

最後に、作者ゴーゴリについて。この人が活躍したのは十九世紀前半で、日本でもよく知られているトルストイやドストエフスキの先輩にあたります。ゴーゴリが後輩たちに与えた影響は大きかったようで、「カラマーゾフの兄弟」の作者は「我々は皆ゴーゴリの外套」から生まれたのだ、と言っています。ロシア文学の伝統は、運命と人との対峙の構図の吐露だというのがある。これはきつと皆さんにも経験があることだと思います。

有頂点になったあと、とんでもない結末が待っています。やられた、という感じがする。作者ゴーゴリにやられたのか、アカキイ・アカキエウイッチにやられたのか、誰にやられたのか、よくわかりません。結び、読んでみて下さい。

陵新聞の伝統を守るために奔走した5人の少年たち。四月からも頑張るぞ！

松田「三学期は思いがけない道院で、部にもあまり行けなかった。一学期は新入部員と頑張るぞ！」

伊原「僕はこの新聞を作るのに余り仕事をしてないのですが、これからもよろしくお願ひします。」

脇田「今回の新聞編集は、M君の長期欠席により大変苦労した。部長のわがままには困ったものだ。」

柳原「よお。俺は新聞部のハレーすい星と呼ばれている。(NON・AGE)ともどもよろしくな。」

松本「後記に文章を書くのは初めてなので、何を書いたらいいのかよくわかりません。不言実行！」